

近代中国における歴史人物評価をめぐって — 鄧演達、楊杰、蔣百里の生涯をヒントに考える —

Reconsidering the Evaluation of Historical Figures in Modern China
— Hints from the Lives of Deng Yanda (鄧演達), Yang Jie (楊杰)
and Jiang Baili (蔣百里) —

細井和彦*

Kazuhiko HOSOI

内容提要

与日本の「浄化思想」不同, 中国对历史人物的评价往往受现体制政治倾向的左右。从目前的研究成果可以看出, 目前我们所看到的衡量历史的标准(既革命史观), 很多是与史实不符的。在中国大陆, 对历史的研究早已着手, 在解读历史资料的前提下评论历史人物的研究也已经开始。但是在台湾以台湾史作为学校教育的主要教学科目, 中国史为辅的历史教育已经进行了许久。

本论文以中华民国期间, 即活跃于20世纪前叶的邓演达、杨杰、蒋百里(方震)三人的生涯为线索, 旨在探明历史人物评价的现状。

「キーワード」: 歴史人物評価 士官教育 鄧演達 楊杰 蔣百里

はじめに — 問題意識

中国における歴史人物評価の基準は日本とは大いに異なる。とりわけ、近代以降においてはそのときどきの政治状況に多分に左右されるようになった。その理由は「革命」が中華再建の至上命題になったからである。ここでの「革命」の意味は、中華王朝時代の「命を革める」という王朝交替の原則ではなく、西洋式の *revolution* に近似する。こうして古来より「蓋棺論定（もしくは蓋棺定論。人物の評価は死後になってからはじめて定まるという意味）」とは言うものの、通常、生前に一度貼りつけられた政治的意図が濃厚な「レッ

*本学教授・近代中国史 (Modern China History)

テル（政権による公式の評価）」を剥がすには、多大な労力と代償を払わなければならないことが少なくなってきたのである。そして現在でも剥がされていないレッテルに苦悩する本人および子孫が存在する。

一方で日本では一般に「水に流す」とか「禊ぎ（みぞぎ）」という、いわば「清めの思想」が日常生活に息づいている。犯罪を犯しても罪を深く認めて職を辞する行為が社会的に認められている。かりに権力を手放したとしても一定の時間が経過すれば、ふたたび権力を得るチャンスがあたえられ、人生をリセットできる。被疑者・容疑者から受刑者となったとしても、「罪」という「穢れ」が一定時間の経過で清められる。日本の刑務所では受刑者に更生事業がおこなわれるのが普通で、国家は受刑者に教育を施して、社会復帰に向けた技術を習得させるのである。生前に悪事を働いた極悪人でも、死んでしまえば死後の世界にまでは悪事の数々を持って行けないという論理が導き出せる。悪事は死して後に浄化されて清められる。もちろん墓所を暴いたりはいしないし、されないのが普通である。人間の本質は善ととらえられている。日本では恨みを抱いて死んだ人物の祟りを恐れて、神として祀って鎮魂してしまう例も多い¹⁾。死者の怨霊を恐れるが故である。

日本とはある意味で対局的なのが中国の徹底した「復讐の思想」である。悪事は死しても悪事である。死者も落ち着いてはいられない。「死者（死屍）にむち打つ」とは伍子胥が父兄の恨みを晴らすために楚国の平王の墓を暴いて屍をむち打った史実が語源である²⁾。権力を掌握した人物、いわゆる権力者は永遠に自己の権力を保持しようとする。権力者が権力を失った時の末路は惨めだからだ。始皇帝が地下宮殿を構築し兵馬俑坑を東方に向けて配置した史実がこれをよく物語っている。

くわえて近代中国社会は「革命」と「戦争（内乱・戦乱）」の連続だったから、正統性を巡って人物評価の基準が作為的に構築された感も否めない。漢奸（漢民族の裏切り者。日本的に言えば非国民）というレッテルの出現、孫文、蒋介石、毛沢東といった中核的人物からの距離感（個人的な親疎と忠誠度）、中国国民党と中国共産党の二大政党中における職位（権力の中枢への遠近距離）と所属派閥（人脈）、である。

本論では上記の問題意識に依拠しながら、鄧演達と楊杰、蔣百里の三者を実例に、かれらの経歴・研究史などを分析しながら、近代中国における人物評価の現状を考察してみたい。なかでも楊杰については、筆者が実施した孫にあたる楊徳慧女史へのインタビューも参考にする。三者とも清朝末期の一大風潮となった立身のルート、将校（士官）教育を受けて外国留学を経験している点が共通している。そして中国国内の活動では中国共産党よりも中国国民党との関係の方が深かった。しかしながら、結果的に中華民国－台湾での評価は三者ともそれほど高くない。そうした三者の共通点や相違点、結節点に関しては、各論を踏まえて本論の末尾で詳細に分析したい。

1. 第三党党首 鄧演達のケース

鄧演達（1895年－1931年）は中国国民党臨時行動委員会（現在の中国農工民主党のこと。民主諸党派の一つ。現在の所属党員の構成分子は医療衛生関係従事者が主と指定されているが絶対というわけではなく、科学技術、文化教育界の知識人も党員である）の実質的な創立者で、初代党首（幹事会総幹事）となった人物である。鄧演達は中国国民党でもなく、中国共産党でもない中国国民党臨時行動委員会（第三党と呼ばれた）を結党した。近代中国の二大政党体制に異論を唱えたわけである。この事実は中国では常に否定的評価を生み出しされかねない要素であり、鄧の政治思想は共産主義に到達できなかった「小資産階級（プチブル）」の代表であると限界を指摘されてきた。

鄧小平時代になり時の総書記の胡耀邦が『人民日報』（1981年7月2日）紙上で、「我々の党を支持した党外の親密なる戦友」と具合名を挙げて高く評価したことが、鄧演達研究を強く推進する契機になった。胡耀邦の評価は発表当時に四つの現代（近代）化政策が推進されていた事情と深く関わっていると考えられる。のちに広東鄧演達研究会（後述）が成立し研究の牽引車となっていく。

さらに鄧演達の場合、毛沢東や周恩来とも面識があり、近い職場で仕事をした経験も大きく作用しているだろう。中国では二人とも功績が圧倒的であるからだ。二人の鄧演達評価は悪くないばかりか、非常に高いと言える。毛沢東は断片的に数回、「鄧演達先生その人はとても良い人である。私は大変好きだ」などと評している³⁾。周恩来は鄧演達について比較的長いコメントを残している。やはり中核は「小資産階級の過激派の代表で、土地革命に賛成し、我々共産党と長期間にわたり合作し、国民党では左派だった」と述べている部分であろう⁴⁾。そして何よりも鄧演達が孫文から信頼を得ていたこと、孫文夫人の宋慶齡との関係も親密だったこともあって、中国大陸での評価は高くなっていると言えよう。

葬られ方もまた人物評価の重要な指標の一つに数えられるとすれば、鄧は死（南京麒麟門外で殺害）後、埋葬された地点から墓所が移設された。現在は、南京の紫金山にある中山陵の左（東）側（靈谷寺東側）に墓所が建造され埋葬されている。1957年の移設は周恩来が主導し国務院が資金を供出した。鄧演達墓は現在では、愛国主義教育基地となっている⁵⁾。右（西）側には梁仲愷・何香凝が夫妻で埋葬されており、あたかも両側から中山陵を守護しているかのように感じられる。

鄧小平によれば、毛沢東は中山陵のような陵墓の造営を嫌っており、遺体は火葬に付されて遺灰のみが保存されるべきだと主張し、共産党の火葬政策を推進したという。ただ、この毛の考えはひとまず横に置いておき、ここでは中山陵の持つ意味を考えてみたい。「国民党の北伐が首都に至り、蒋介石が孫逸仙の銀の柩の安置されている碧雲寺の劇的な訪問

を行った後、故総統の遺体は南京に移され、国民党の首都の東の紫金山にある立派な記念建築の中に据えられた。この廟は『現代中国の国家的礼拝所』として一帝室の陵墓とは違い一公開の参拝場所となった。ちょうど孫逸仙が、明朝陵墓での儀式を主催することによって、彼自身の革命運動の正当化をたびたび図ったように、彼の後継者達も孫の陵墓のオーラの中に彼らの政治を包み込んだ⁶⁾のである。そうして中山陵は「南京の国民政府へのいかなる公式訪問も、儀式的クライマックスは孫文の記念堂に出かけることであり、他のいかなる場所一首都の大総統執務室も含めて一よりもこの墓が国民政府を象徴した。民国にとっての新しい聖なる儀式的核、つまり全ての後継統治者の承認すべき革命的権威のしるし、となった」⁷⁾のである。ゆえに、鄧演達墓の位置は政治的に考えて非常に重い場所にあり、鄧の政治的な地位は死後に高められたと言えるのである。

鄧の経歴についてはこれまで各種の伝記が存在しているので、各伝記を読み比べてもかなり詳しい履歴が理解できる。伝記の紹介をしておくと、丘挺・郭曉春『鄧演達生平與思想』は古典的作品である。また年譜も編纂されており、一つは丘挺『鄧演達年譜』が簡便な年譜である⁸⁾。近年、既発行の伝記と年譜類の記述を網羅する『鄧演達年譜会集』が出版され、研究に新たな地平を提示している。江蘇省の中国農工民主党の一基層黨員の手による年譜であり、鄧演達研究の奥深い一面を見せられ驚愕した覚えがある⁹⁾。

広東鄧演達研究会の創立と継続的な学術討論会の開催、出版活動が中国における鄧演達研究を牽引することになったと断言できる。1994年6月14日、故郷の惠州市の惠州賓館でで成立大会が開催された。研究会章程を議決、役員人事（理事と常務理事、会長・副会長・秘書長・顧問）を決定した¹⁰⁾。毎年一回の研究會活動報告を含めた国内研究者主体の研究會に加えて、1995年と2000年には二回、大規模な国際学術討論會が開催され、その成果は二冊の論文集にまとめられた¹¹⁾。一回目は広州市の黄埔地区で生誕100周年（黄埔陸軍軍官学校の所在地で開催された）、二回目は鄧の故郷惠州市で開催された。ともに広州在住の農工民主黨員が資金面を含めて陰ながら研究會活動を下支えしてきたと耳にしたことがある。また研究會の会長には長く梅日新が、秘書長は鄧演超（鄧演達の異母弟）が中心となり研究會の運営を切り盛りしていた。他にも建国以来の重鎮が数多く存在しており、陰日向に研究會の活動をバックアップしていたことも良い方向に作用した。この広東鄧演達研究會のような研究會の存在の有無は歴史人物評価の前進に大きな影響をおよぼすことになる¹²⁾。後に述べる楊杰と蔣百里のケースと比較してみれば、一目瞭然である。鄧演達に関する研究業績は二者に比して圧倒的に多数あるからだ。

では日本ではどのような評価が提示されてきたのだろうか。最初に「中国国民党左派」という評価が提起された。これは第一次国共合作時の汪精衛等への評価のなかで使われた、孫文の三大政策への距離で右派、左派、中道の人物かを分類するものであった。また中国社会の特徴は国共両党に属さない無党派中間派層が膨大であるという点に着目した研究が

進められた。中国国民党臨時行動委員会の結党者という事実からは、「第三勢力の開拓者」という評価も提示された。

台湾では蒋介石に逆らい逮捕・殺害されたとして評価が低く、研究対象として顧みられなかった。近年、国民革命軍の政治工作制度に論点を絞った研究書が出版されている¹³⁾。欧米の研究成果はJ.K.Olenikの地道で着実な研究に代表されている¹⁴⁾。

筆者はこれまで鄧の生涯を大きく三つの時期に区分して鄧演達研究を進めてきた¹⁵⁾。第一期は「軍事救国」のスローガンに賛同して青年将校を目指す将校救国時期である。第二期は青年将校から政治家へと転身する時期である。広東で孫文派の粵軍第一師で青年将校として活躍した後に黄埔軍校教練部副主任となり頭角を現した。ドイツ留学を経て、国民革命軍総司令部政治部主任として北伐に従軍、武漢国民政府で中心人物の一人となる。部隊を率いて督戦する将校から部隊を離れて政治家になるには、決断が必要だったろう。部隊は自身の政治資源になりうるからだ。鄧の場合は広東時代に直接部隊を率いて戦功をあげた。その余力で政治家になってからも既存の部隊との関係を維持できた。第三期は二大政党ではない第三党を創立して新党の党首となり、政権党である国民党支配を転覆しようと活動した。第三党の政治綱領は鄧の欧州滞在期間の見聞と学習によって産み出された。社会民主主義思想から影響を受けていると言える。

ただ、いずれの先行研究においても、鄧演達を保定陸軍軍官学校で将校教育を受け部隊を率いた経験を持つ軍人の側面を重要視していない(Olenikは将校鄧演達に着目している)。筆者は鄧が伝統的教育と西欧的な新知識を受容した形で産み出された新式教育の申し子的な存在だと考えている。そして近代以降の中国社会を突き動かす原動力となった二つの権力、すなわち政治権力と軍事権力とに着目して、「軍人政治家」と評価したことがあるが¹⁶⁾、現在でもこの考え方に変化はない。近代中国において政治権力保持者にとって背景にすべき権力は軍事力(治安維持力と換言してもよい)だったから、腐心すべきはその監督・維持だった。蒋介石や毛沢東が好例であるが、近代的な政治制度下で伝統的な人間関係の紐帯を利用しながら、維持システムを構築したのだった。

2. 軍事戦略家 楊杰のケース

楊杰(1889年-1949年)は白族の出身である。白(ペー)族は現在の雲南省大理を中心に居住している。大理には白壁の住居が目立つがまさしく白族の伝統住居である。当然ながら、楊杰も大理の出身である¹⁷⁾。白族は古くから漢族の文化を受容し、大理国を建国している。白語という言葉を持ち、固有の文字を持たず漢字を用いて言語表現した。漢字の導入により白族は漢族文化になじむとともに漢文化を積極的に受容したので、雲南に居

住する少数民族（あくまでも現在からの視点）中ではもっとも漢民族化している。

筆者は以前、楊杰に関する1937年までの簡易年表を作成し、楊杰の研究史を分析したことがあるが¹⁸⁾、日本語による楊杰研究は管見の限りでは見当たらなかった。中国では楊徳慧女史の伝記と思想研究の成果が参考に値する。ほかにも参考にすべき論考は存在するものの、楊杰単独の論考は少ない。日本では例えば、『近代中国人名辞典』¹⁹⁾は現行の近代中国人名辞典では記述内容がもっとも詳細であるのだが、楊杰の名前はない。鄧演達と蔣百里の二人は掲載されている。台湾では、鄧演達と同様、專題研究はほとんどない²⁰⁾。

ここからは、楊徳慧女史訪問時のインタビュー記録を使って、親族から見た現在の楊杰評価を考えてみたい。まず楊徳慧女史についてであるが、女史は楊杰の孫にあたる。本当は楊杰二人の息子がジフテリアで病死してしまい、妻の趙丕頤も1930年に肺結核で病死してしまったので、楊杰には跡継ぎがいなかった。そこでのちに兄の息子である楊兆龍を息子にしたわけである。この楊兆龍の娘が楊徳慧女史なのである。偶然の一致だが鄧演達もまた妻鄭立真との間に跡継ぎがなかった。そこで兄鄧演存の娘をもらいうけて養子跡継ぎとした。これが鄧京育女史で、医学の道を志し、広州市第二人民医院産婦人科主任医師として患者のために尽力した。鄧には鄧思干というもう一人息子がいたが、かれは鄭立真が赤子のときにもらい受けて養育したので、鄧家と直接の血縁関係にはない。楊徳慧女史は歴史学研究の道を進み雲南大学教授となり、祖父楊杰の伝記と研究書の計2冊を出版している²¹⁾。現在は退職して雲南市内で暮らしている。筆者は2010年に雲南大学外字処に問い合わせをしてから、紆余曲折をへて直接連絡を取ることができた。そして2011年2月16日の午前中、昆明市の自宅まで訪問して祖父楊杰について話を伺う機会を得た。互いに初対面ということもあり、楊杰関連史料の提供問題や微妙な歴史事実の確認などはせず、まずは信頼関係を築くことを目的にして望んだ。そしておよそ2時間余りの間、楊徳慧女史の話聞くことができた。以下、インタビューの内容を基にして述べていくことにする²²⁾。

第一に、楊杰生家（故居）などかれの足跡のわかる記念館の有無に関連して質問してみた。ある程度は予想していた答えであったものの、かなり衝撃的だった。楊杰は国民党の中央委員会委員、参謀本部次長、陸軍大学校校長（教育長）等の要職に就任していただけたことはあり、中国の主要都市に不動産を所有していたという。北京をはじめ、上海、浙江（どこかは未確認だが杭州の可能性が大）、南京、廬山（民国時期からの著名な避暑地で、多数の著名人の別荘がある。国共両党ともに夏の会議に使用した。現在は世界遺産になっている）、昆明に邸宅を保有していた。大理はもちろん生家である。このうち、子孫が所有権を有する物件は一件もないという。現在、北京の邸宅の跡地には中国国民党革命委員会（民革とも言う。中国農工民主党と同じ、民主諸党派の一つで、1948年1月に香港で結成された。国民党内の反蒋介石・親共産党勢力が糾合した）が使用している本部があると

いう。ほかの邸宅はすべて他人の手に渡ったという。昆明の住居は四清運動（1957年後半から農村を中心にして行われた政治運動。人民公社における労働点数・帳簿・倉庫・財産の再点検を行った。都市では五反運動が行われたとされているが、都市でも四清運動は実施されていた）で没収された。文化大革命終了後に文革で強制的に没収された動産を主とする個人資産は賠償されることになった。だが四清運動は文革開始以前の政治運動であって、賠償の対象とはならなかったという。楊徳慧女史は「賠償しないと言うのならそれで仕方ない。私たちには今は住むところがあるから、家は要らない」と苦虫をかみつぶしたような顔つきで語っていたのが今でも印象に残っている。

さらに大理にある生家について聞いた。一般論として、著名人の生家は保存・整備され記念館として公開されることが多いからである。鄧演達の生家はすでに1980年代に修復され保存の対象となっていたからである。この質問への楊女史の答えは、「今、生家の半分は王二小学校の運動場に提供している。残りの半分は別の人が住んでいる」という現況説明からはじまった。そして政府（どのランクかは不明）は生家を資産として遺族に返還したい。ついでに返還後に遺族主導で大理の生家を修復してもらいたいという考えを伝えるとともに、遺族の意向を確認してきたという。楊女史は「私自身は70歳を過ぎていて、気力も経済力もない。息子や親族も大理から離れて生活している者もいるから、修復は難しい」と話したそうだ。そして何よりも、遺族は俸給で生計を立てている普通のサラリーマンであり、修復するにはだけの資金は巨額（数百万円から場合によっては数千円）で供出が不可能であるということだった。そして政府側に対して、生家は政府に譲渡するから政府で修復してくれたらよい。展示する資料については持っているものを提供できると提案したのだという。その後も政府から電話が掛かってきたり、手紙が来たり、役所の担当者が家を訪ねてきたりするものの、政府側も資金を拠出して生家を保存して記念館にするまでの提案はないので、生家の扱いについては進展がないわけである。

現代的な資金難、正確に言えば、出資金の出先が決まってないから、生家修復、記念館設立・運営のネックになっていると感じた。つまり、よほどの篤志家（企業家）が出現してきて、楊杰を中華民族の英雄的な軍事戦略家として顕彰するために資金提供でもしてくれない限り、もしくは中央政府・民革・雲南省政府もしくは大理市政府など公の部門が公的資金を提供してくれなければ、実現は困難であろう²³⁾。

第二は、『楊杰文集（選集）』出版にまつわる話である。鄧演達にはすでに民国期に『鄧演達紀念集』（1932年）、『鄧演達先生遺稿』（1932年）、『鄧演達先生遺著』（1949年）が出版されている。また共産党政権下でも没後50周年を記念して『鄧演達文集』が、1980年代後半には『鄧演達歴史資料』が世に出た²⁴⁾。広東鄧演達研究会が『鄧演達文集新編』を出版している²⁵⁾。

蔣百里も没後しばらくしないうちに『蔣百里抗戦論集』等の文集が出版された²⁶⁾。大陸

では文集も出版されていないのだが、台湾では『蒋百里全集』全6冊も出版されている²⁷⁾。

鄧、蒋と比較したとき楊杰の場合は文集が出版されていない²⁸⁾。文集の有無は研究を進めていく上で、ハードルの一つになる。原因は楊杰文集が未刊行である原因は、生家の修復がなされていない状況と同じ原因であることがわかった。楊徳慧女史とかの女の息子などを含めた親族は2、30年前に文集出版のための史料収集をしていた。原史料を「書き写す」ことで史料を増やしていったという。地元の昆明以外に、長期の休暇や出張などを利用して北京、上海や南京などの図書館・檔案館に向いたことは想像できる。労力を費やし時間をかけて進めたのだ。収集した史料の総字数は数百万字にもなったという。整理は楊徳慧女史を中心に進められて一通りまとまった原稿が完成しているが、お蔵入りの状態なのだという。ただ自費出版するとなれば諸経費を含めて数万元が必要であるという。出版社は売れるかどうかという「経済的な利益」を第一に考えるので、印刷部数を増やして元手を回収しようとするという。内容も幅広くなく「軍事」領域であり、研究者も少ないから、利益も期待できないのである。資金援助があれば出版したい意向だったが、学術研究書出版に当たっては、日本でも同様である。

楊徳慧女史は今は「出版する書籍が現代社会に受け入れられるような現実的な意義がなければ公的資金の援助を受けて自費出版することはできない」と述べた。楊徳慧女史が発した「現実的な意義の有無」という一言が心に引っかかった。学術研究にも功利主義が深く入り込んでいる点は、現代中国社会の一面を象徴している。1980年代から90年代前半の改革開放初期段階は、文革で出版が制限されていたので、出版量が増大した。需要が低そうな学術書でも目の目を見ることができたが、現在はそう単純ではないのだ。楊徳慧女史は「史料収集と整理に数十年間の歳月を費やした。今から考えれば（現在の政治状況を加味すれば）、良いと思われる史料も悪いと思われるそれも両方とも入れた（实事求是の態度で臨んだ）。残念ではあるが出版不可能ならばどうにもならない。かれら（各担当部門）と交渉して十数年間になるがいまだに結果が出ていない。交渉開始当初は出版を考えてみますと言っていたが、今は第一に利益を追求するので、考えてみますとすらすら言わなくなった」とあきらめと不満の入り交じった表情で述べた。女史の勤務先だった雲南大学には相談しなかったのかと聞くと、雲南大学に話しを持って行ったときには出版に前向きだったが、やはり経費を誰が出すのが問題になり取りやめになったのだという。

ロシア、アメリカをはじめとするいくつかの国々からは史料提供を求める問い合わせがあるし、以前は解放軍高官の娘が「楊杰の愛国主義に感動した」として訪ねてきたり、中央軍事委員会の高官も娘が国防科学技術大学で楊杰の論文を書きたいと言っており、史料の提供を求めてきたという。また北京、上海、昆明などからも研究者の訪問客があるということだった。

このように一方で楊杰についての問い合わせや面会要求、報道番組作成のための資料提

供要求やインタビュー申し込みなどがあるという。けれども、それほど報われていないのは何故なのだろうか。

総じて、女史からは現行の社会状況、特に経済利益優先主義から負の影響を被っているのだと訴えを聞いたわけであるが、どうもそれだけではないように感じられた。やはり、政治的な影響力の問題が大きいのではないだろうか。なぜならば、中国では相応の政治権力があれば経済問題もたやすく解決できるからである。先に述べた鄧は毛や周との関係が深く印象も悪くなかったので、後の評価も顕彰の度合いも高くなったからである。

楊杰は第一次国共合作以来の国民党員で、本来、蒋介石の直属の部下だったのだが、じょじょに最終的に共産党に傾斜していった。本来的に反共ではなかったがどちらかといえば親共の方向に転換していった。共産党は雲南を中心とする西南の解放のために、雲南の有力者とのコンタクトを模索していた。楊杰は1937年以降のソ連滞在をへて、自己の国防理論を人民国防理論の方向に変更させていった。共産党も雲南の解放戦略を考える上で楊杰は重要人物だったので、重慶の周恩来は接触を図った。楊杰の方は共産党の接触を受け入れる一方で、国民党から離れた同志と民革を設立し、中央委員会常務委員に選出された。両者の利害が一致して、楊杰は北京で開催される中国人民政治協商会議第一回全体会議への参加要請を受けていた。蒋介石の暗殺命令が下り、危機一髪昆明から香港へと逃れ北京へ出発する直前、特務に銃殺されてしまったのである。

蒋介石と楊杰の人間関係は良好だった。楊徳慧女史は蒋介石も楊杰の才能を高く評価していたし、高い地位に起用したと述べた。二人の分岐した原因は共産党を巡る政見の相違だと述べていたが、両者の性格の相違も影響しなかったのか疑問に感じた。ただし国難にあたり楊杰の才能を生かし切れなかった蒋介石国民党側の理由については解明の余地がある。

3. 軍事戦略家 蔣百里のケース

蔣百里（方震）（1882年－1938年）は秀才の資格を持つ。いわば中華の伝統教育を受け伝統的な出世コースに乗りかけたわけである。挙人になれなかったのではなく、なろうとしたが科挙が1905年に廃止され、別の道を模索せざるをえなくなったのである。伝統知識教育と新式教育の狭間で翻弄されかかったが、近代的な軍事知識を習得する教育を選択した。貧困家庭に生まれた蔣百里にとって、幸運にも、公金（奨学金）を獲得して日本へ留学する機会に恵まれた。もちろん蔣が非常に優秀だったからであるのだが。

蔣百里は楊杰とともに、「南楊北蔣（南方に楊杰ありて、北方に蔣百里あり）」と評される軍事学の泰山北斗であり、世界的な軍事戦略家でもある。二人へのこの評価は客観性が

高い。二人には直接の面識がなかったが、お互いの存在を意識していた。楊杰の『国防新論』は題名からして蔣百里の『国防論』の存在を認めた上で執筆しているし、陸軍大学で高級将校教育に当たった。実は蔣百里は鄧演達とは面識があり言葉を交わしたことがある。場所は南京、1931年に二人が逮捕拘禁されていたときに部屋が隣だった。

蔣は日本とドイツに留学しており、両国で軍事学を修めた。優秀な成績を修めて帰国した。辛亥革命後に保定陸軍軍官学校の校長に就任、校風を一新して国家に奉仕できる青年将校教育にいそしんだ。そのために保定軍校を管轄する陸軍部軍学司とも積極的に交渉したが、思うような予算をもらえなかった。学生への責任を取るためにピストル自殺を図ったが、日本人医師（日本領事館付き）に救命され一命をとりとめた。必死に看病した日本人看護師佐藤屋子（中国名：左梅）とのちに結婚し、5人の娘をもうけた。梁啓超と親交があり、欧州視察団の一員になっている。人的交流が広く、この点は軍事畑一筋だった楊杰とは異なる。

蔣百里の名を現在にまで残しているのは、中国人を鼓舞した二つの名言であろう²⁹⁾。日中関係が風雲急を告げて後戻り不可能となり戦争に突入するなか、蔣百里はこれまで発表してきた自身の論考をまとめて一冊の書物を出版した。それが『国防論』である。『国防論』出版に際して、その扉に書かれていた一言、「中国には（日本軍に勝利する一筆者補足）手段がある」である。この手段とは『国防論』では、「国民皆兵」政策を主眼としていた。全中国国民が決起すれば中国は日本に必勝するという論理である。引き続き『日本人—一個外国人的研究』の結びの言葉も著名である³⁰⁾。当初、匿名で『大公報』に連載され波乱を巻き起こし、後に小冊子化されて一世を風靡した。「勝っても負けてもかれら（日本人）とは絶対に講話してはならない」がそれだった。

保定軍校の校長就任以後、北京政権下で要職に就かなかった。国民党政権になっても蔣百里と蒋介石との距離は縮まることまなかった。ゆえに蔣百里は国民政府軍事委員会高等顧問といった閑職に起用されるに留まった。

中国大陸でも台湾でも評価は高いものの、抗日戦争初期に心臓麻痺で病死してしまったのは残念でもある³¹⁾。ちょうど陸軍大学代理校長として再び自説を現実化する機会に恵まれた時だけになおさらである。蔣の頭の中には共産党という文字はなく、反共というよりはどちらかといえば眼中になかったと言える。かといって現行の政権党である国民党にもべったりではなかった。蒋介石との仲も可もなく不可もなかったと言える。蒋介石からすれば伝統的な知識人の気質を有していた扱いにくい人材の一人だったのではないだろうか。

蔣百里の墓地は鄧演達とは対照的である。死後、広西宜山に埋葬されたが、1948年に浙江省政府が左梅夫人の許可を得て、火葬にして杭州西湖南の南山公墓に埋葬されている。特別な墓所ではなく、一般の墓所の一角にあるので、よほど詳しければ捜すのに苦労

する³²⁾。楊杰は殺害後に香港で火葬にふされ、昆明西山に墓所が設けられた。共産党政権から革命烈士に認定されたのは1982年6月でとても遅い。

蔣の生家も鄧と同様に記念館になっているが、開館は不定期あると聞くので、それほど整備されているとは考えにくい。地元で国際規模の学会が開催された話しも聞いていない。現在の評価は、地元の名士的な領域を出ないのではなかろうか。

おわりにかえて

最後に、三者の共通点と関連性の深い点、相違点から、歴史人物評価についてまとめておきたい。第一に概論である。三者とも「軍事救国」を出発点とした。新式教育の中心的なコースの一つだった陸軍小学堂（小学校）、陸軍中学堂（中学校）、保定陸軍軍官学校、ドイツもしくは日本に士官（見習）留学をして将校となった点ではほぼ同じような経験をしたと言える。鄧は保定軍校を卒業後に広東で軍隊改革に着手した。1920年代に二回、ドイツおよび欧州各国に滞在しているが、軍事学を学んだわけではなく、独自の政治理論構築のため学習し、見聞を広めた。楊、蔣の両名は日本に軍事学を学ぶために留学している。楊は二回、陸軍士官学校と陸軍大学校に、蔣は1901年に日本に留学後に成城学校から陸軍士官学校へと進学した。1906年からドイツ軍で士官研修を経験した。ただし、三者中で蔣百里のみが実際に部隊を率いて戦闘に参加した経験がない。鄧は政治家に転身し国民党から飛び出して第三党を結党したのに対して、楊と蔣は軍事理論家として国民党政権と関係を持ちながら、自身の国防戦略をまとめて書物にした。

三者の経歴からは、1905年の科挙廃止前後、清末から民国初期にかけて、軍事学校を卒業して将校となるのが科挙に代わる立身出世のルートの一つになったことを表している。将校教育ルートを基点にして異なる人生を歩んでいったわけであるから、入り口が同じでも出口が異なる事例があることは、当然考慮せねばならないだろう。

第二に、中央政権との関わりという点から見たときに、三者の評価にどのように影響をおよぼしているのだろうか。国共両党の二大政党内での活動歴、当時の政府での職歴、中核人物（孫文・蒋介石・毛沢東・周恩来）との親疎の度合いを考える必要がある。三者はともに国民党との関係が深かった。鄧と楊は国民党員であり、党では中央委員、政権内部でも相当な高位に就いた。蔣のみは政治権力とは一定の距離を保ちつつ在野の著名人として生きた。蔣の生き方は伝統的な知識人のその一類型と言える。鄧、楊は政権中枢部に入り込んだものの、蒋介石との距離感（親疎の度合い）維持システムのコントロールのなかでバランスを崩してしまい、結果的には命を奪われることになった。両者ともに指導者との親密で良好な関係を継続させる機会があったが、着陸点を見つけれなかったわけで

ある。そして二人は命を奪われたが、共産党政権下では「革命烈士」として祭られる対象になった。鄧は現政権下でも果たすべき役割があたえられ、墓所は中山陵東側に定められた。

第三に、本文中でも述べたように、人物研究においては文集や全集の刊行が研究の進展を促進する。そして研究成果の蓄積が人物評価の一般化・普遍化・評価の多様化に大きな作用をもたらす。鄧演達も蔣百里も複数の文集が、蔣百里は全集も既刊のため、複数の伝記と研究書が出版されている。さらに人物事跡を時系列的に史料を根拠にしながら列挙した本格的な年譜の有無もまた、研究の進展を左右する。鄧には前述の『年譜会集』が研究に有益である。研究成果の蓄積は鄧演達がもっとも多い。蔣にも許逸雲編著の本格的な年譜がある³³⁾。楊杰に関しては文集が未刊行のために研究成果も少ない状況であるが、軍事学、国防方面からの研究アプローチが出現している。楊杰は健筆で三者の中で執筆分量がもっとも多いが、昆明の住宅が日本軍機に爆撃された際、保存していた貴重な直筆の原史料が消失してしまったという経緯がある³⁴⁾。このため、現在史料是北京・上海・南京・昆明・重慶の各地に分散しており、収集するだけでも手間暇がかかる。

第四に、新史料の発掘と発見という観点から検討してみたい。本文中でも述べたが、鄧演達の場合、家族宛の書簡の発見・公開が従来の研究を補完、進展させる好結果を産み出している³⁵⁾。また日記があれば、さらに研究が進展するだろう。鄧演達の日記は存在した可能性があるが、現在は存在するとは言えない。想像の域を出ない。二回目の渡欧時にも収集した資料にしても郵送しているはずなのだが、おそらく逮捕後に散逸してしまったのだろう、見つからない重要史料もある。楊杰日記は現存している。楊徳慧女史は訪問時に系統的な日記の存在は認めなかったが、断片的なものが存在していると言明した。中国第二歴史檔案館には日記を含めた楊杰檔案が保管されており、先行研究ですでに楊杰日記が利用されている³⁶⁾。三者とも海外生活が比較的長いことから、日本やドイツ、ロシアにはまだ未発見史料が眠っている可能性が大きい。今後は大陸以外の地域での収集も必要になって来ることが予想される。

歴史人物の名を冠した研究会が存在しているか否かも研究の進展に大きく影響する。鄧演達のケースで詳しく論述した通りである。しかしながら、鄧の研究会の存在はまれであろう。継続的に学会活動と研究会活動が実施されているのは、人物研究が盛んな中国・台湾地域でも現在はほとんど目にしないからである。

最後に、生家の利用問題を考えなければならない。鄧と蔣は生家が当人の記念館となっているのに対して、楊杰のみがそうになっていない。蔣の生家は地元政府管理の記念館として存在している。鄧のそれは広東省惠州市にあるが生家周辺と一体化してインフラが整備され、大規模に鄧演達記念園の建設がなされている。日本風に表現すれば、地元の名士である鄧演達を利用した町おこしとなるが、中国では鄧演達精神を利用して次世代への革命

愛国教育を行う意味合いが強い。鄧は現政権にとって、有用な存在なのである。

本稿を作成して見て、ある歴史人物が生前の功績を分析した結果として正当に評価されているかどうかを判断するには、おおまかではあるが共通するいくつかの基準のようなものがあることがわかった。この評価の基準と言うべき個々の要件については今後も検討を重ねてみたい。

[附記] 本稿は平成 24 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究課題番号 21520729 の成果の一部である。

-
- 1) 聖徳太子一族を祀ったとされる法隆寺や菅原道真が学問の神様として祀られている太宰府天満宮・北野天満宮が代表的である。なお聖徳太子についてはその存在を含めて諸説がある。日本古代史に関する鎮魂・怨念についても幾多の説があるが、筆者は梅原猛の以下の書籍が参考になった。『聖徳太子』1・2・3・4 (小学館・1980・1981・1982・1985 年)。『水底の歌 柿本人麻呂論』(上)・(下) (新潮社・1981 年)。
 - 2) 司馬遷『史記』伍子胥列伝によると、鞭打つ場面は「呉兵 郢に入るに及び、伍子胥昭王を求む。既に得ずして、乃ち楚の平王の墓を掘り、其の尸を出だし、之を鞭うつこと三百、然る後に已む」と描写されている。「尸に鞭うつ」のは司馬遷の作為的描写であり、本当は「墓に鞭うつ」が正しいという。司馬遷はことさらに凄惨な情景を演出することにより、「怨み」を抱く伍子胥の人間像を一層強調して描こうとしたという。宮刑に処せられた司馬遷の心の奥底に潜む怨念が現れている。ただ、屍を鞭うつ説は司馬遷が勝手に改めたものでもないという。当時、すでに言い伝えがあって、ストーリー性から司馬遷が選択したという (福島正『史記・漢書 鑑賞 中国の古典 第7巻』角川書店・1989年, 79-81頁, 443頁)。
 - 3) 梅日新・鄧演超主編『回憶鄧演達』(広東人民出版社・1999 年), 1 頁。
 - 4) 同【3】, 2-3 頁。
 - 5) 南京の中華門南側にある雨花台革命烈士紀念館内部には、展示が新装されてこれまでは見ることがなかった鄧演達の事跡を展示したコーナーが設置されている (2010 年 8 月の見聞)。
 - 6) フレデリック・ウェイクマン・Jr. 「第十一章 毛沢東の遺体」(ジェイムズ・L・ワトソン, エヴリン・S・ロウスキ編著 西脇常記・神田一世・長尾佳代子訳『中国の死の儀礼』平凡社・1994 年, 所収), 280 頁。
 - 7) 同【6】, 281 頁。
 - 8) 研究史については、拙稿「鄧演達年譜初稿—近代中国における軍人政治家考察のための一試論」(『鈴鹿国際大学紀要 CAMPANA』No. 7, 2000 2001 年 3 月) を参照されたい。拙稿発表後にも新史料に依拠した有意義な研究成果が発表されているが、鄧演達評価を大幅に変更するような成果は未見である。

- 9) 樊振編著『鄧演達年譜合集』(中国言実出版社・2010年)。同書あとがきによれば、編著者は2006年9月に農工党に入党した。鄧演達に関連する史料を自費で収集し続けたという。筆者は偶然にも2010年10月に広州市で開催された鄧演達の学術討論会に参加した際に市内の新華書店で見出し、購入した。
- 10) 広東鄧演達研究会秘書処編『鄧演達研究通訊』第1期(1994年7月18日)。
- 11) 梅日新・鄧演超・丘挺主編『鄧演達誕辰一百周年国際学術研討会論文集』(広東高等教育出版社・1996年)と梅日新・鄧演超主編『鄧演達研究新論』(華文出版社・2001年)の2冊である。
- 12) しかしながら、休眠状態にある人物名を冠した研究会もあるようである。例えば、改革開放初期に広東で隠然たる勢力を保持していた共産党の実力者葉劍英の研究会が一例である(2010年10月、広州における筆者の見聞)。
- 13) 陳佑慎『持駁殼槍の伝教者 鄧演達與国民革命軍政工制度』(時英出版社・2009年)。
- 14) 筆者は2000年の国際学術討論会でOlenikになぜ鄧演達研究にそれほどこだわるのか質問したが、鄧演達研究を研究のライフワークにしているからだという答えが返ってきたと記憶している。当時、鄧演達新伝を執筆中だと聞いた(2000年9月・惠州市における見聞)。
- 15) 同【8】で作成した年譜では、さらに細かく五期に区分している。
- 16) 同【8】を参照されたい。
- 17) 故郷大理の雑誌には楊杰を紹介した一文がある。楊中興「白族軍事家楊杰將軍」(『大理文化』2007・5 総167期)。
- 18) 拙稿「楊杰による陸軍大学校経営」(立命館大学人文学会『立命館文学』第608号・2008年12月、所収)。
- 19) 山田辰雄編『近代中国人名辞典』(財団法人霞山会・1995年)
- 20) 呉相湘「楊杰與国防新論」(呉相湘『歴史的鏡子』萌芽出版社・中華民國59年に所収)。
- 21) 楊德慧『楊杰將軍伝』(雲南人民出版社・1993年)、同著『楊杰將軍思想研究』(雲南人民出版社・1989年)。
- 22) 楊德慧女史訪問時のインタビューは同意を得て保存した音声記録を活字化した。会話は前後したり、重複したりしているが、本稿の作成に当たって、内容を校正しなおした。
- 23) 鄧演達故居の場合も、修復し展示室を設けた後、惠州市(その下の郷政府)が管轄していた。小学校名も「演達学校」と改名し、付近の道路も整備された。1990年時点では記念行事の時のみ開館されていたようで、筆者が訪れた時も閉館していた。同行したタクシードライバーが周辺の民家で事情を聞き、鍵を開けてもらい参観させてもらった記憶がある(1990年1月14日の見聞による)。
- 24) 『鄧演達文集』(人民出版社・1981年)。題字は宋慶齡による。曾憲林・万雲主編『鄧演達歴史資料』(華中理工大学出版社・1988年)。
- 25) 梅日新・鄧演超主編『鄧演達文集新編』(広東人民出版社・2000年)。
- 26) 張禾草編『蔣百里抗戰論集』(上)(下)(浙江麗水【金華 新陣地出版社】・1939年)。黄萍孫編『蔣百里先生文選』は張禾草編『蔣百里抗戰論集』のリプリント版。国民党軍政要人30数人の

跋がある。

- 27) 蔣復璁 薛光前主編『蔣百里先生全集』全六輯（伝記文学出版社・1971年）。このほかに、国防学会輯『蔣百里（方震）先生文集』（沈雲龍主編『近代中国史料叢刊』758所収）、朱伝誉主編『蔣百里伝記資料』全三冊（台北 天一出版社・1979年）が刊行されている。
- 28) 楊杰の著作が出版されていないわけではない。中華民国期に『国防新論』をはじめとする著書が出版されている。最近では『国防新論』（民国叢書第二編 31・上海書店）と『孫武子』（民国叢書第四編 8・上海書店）が影印されているほか、張豈之主編『民国学案』第六卷（湖南人民出版社・2005年）に楊杰学案が設けられ、主要著作の要点が紹介されている。ほかに楊杰・李浴日著『孫子伝』（東方出版社・2010年）も出版されている。
- 29) 戚厚杰「蔣百里抗戰の名篇名言」（『團結報』第1622号・1995年6月21日）。
- 30) 『日本人——個外国人の研究』は戴季陶『日本論』とともに、数少ない中国人による日本人論の一つである。戴季陶『日本論』には数種類の日本語訳が出版されているが、蔣百里の『日本人』は以前筆者が解説を加えて翻訳したことがある（蔣百里「日本人——外国人の研究」『鈴鹿国際大学紀要』NO.12, 2005—2006年3月所収）。中国では『日本四書 洞察日本民族特性的四個文本』と題されて、2006年に線装書局から出版されている。四書とは、ルース・ベネディクト『菊と刀』、新渡戸稲造『武士道』、戴季陶『日本論』と蔣百里『日本人』である。加えて、蔣百里の『国防論』が民国学術文化名著の一冊として、岳麓書社から2010年に出版されている。
- 31) 中国台湾の両方で以下のような伝記が出版されている。陶菊隱『蔣百里先生伝』（中華書局・1948年）は沈雲龍主編『近代中国史料叢刊』にも収録されている古典的な伝記である。陶菊隱『蔣百里伝』（中華書局・1985年）はその修訂本である。曹聚仁『蔣百里評伝』（香港 三育図書文具公司・1963年）は『一橋伝記 8』・曹聚仁作品集②として1988年に再版されている。このほかに、尹雪曼『一代兵聖蔣百里伝』（台北中央日報出版部・1970年）、李娟麗 包東波『軍学奇才—蔣百里』（蘭州大学出版社・1998年）、張学継『蔣百里生平与軍事思想研究』（中国文史出版社・2001年）、同『兵学泰斗—蔣方震伝』（杭州出版社・2004年）。
- 32) 2009年8月9日、筆者の見地での見聞にもとづく。
- 33) 許逸雲編著『蔣百里年譜』（團結出版社・1992年）。
- 34) 爆撃による史料消失も含めてだと考えられるが、楊徳慧女史は日中戦争が楊杰と自分を含めた家族に多大な不幸をもたらしたと述べた。日本軍の侵攻を避けて昆明に疎開したままになり、田舎に埋没して落ちぶれてしまったというのである。北京や上海、南京という楊杰が活躍した都市に居住していれば、家族もより恵まれた境遇にあっただろうという考えだ。日本人である筆者を前にしての発言であるため、なおさら重く受け止めた。
- 35) 新たに公開された書簡と書簡を利用した研究成果は、梅日新・黄濟福・黄振位主編『鄧演達研究与資料』（中国文史出版・2004年）に収められている。
- 36) 李嘉谷「中蘇關係史研究二題」（抗日戦争研究』1995年1期）。

